View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第66号　2017　223－230

大学生の就職活動における地元志向に及ぼす家族関係の影響

横　田　明　子
（2017年10月４日受理）

Influence of Family Relationships on Local Orientation in Job Hunting by University Students

Akiko Yokota

Abstract: In this paper, we consider the reality and elements of local orientation in job hunting by university students. We investigated the effect of family relationships on job hunting. We obtained the following findings:
・Japanese families are becoming smaller as the number of children declines.
・Relationships among parents, sons and daughters become closer.
・Japanese family members prefer to have some distance from each other.
・Sons and daughters aspire to obtain employment in their local area.

Key words: family relationships, locally orientation, job hunting, university student
キーワード：家族関係，地元志向，就職活動，大学生

１．はじめに

大学生の就職活動に関する近年の特徴の１つとして，地元志向が指摘されている。轡田竜蔵（2009）は，「多くの統計データは，若者の地元志向の強まりを支持している」と述べている。平尾元彦・重松政徳（2006）は，若者の地元志向が「学校の進路指導の現場では広く認識されている」と指摘している。

学生用就職情報サイト「マイナビ」（2012－2015）による大学学部４年生および大学院博士課程２年生を対象とした2011年から2014年に実施した調査の結果によれば，卒業後に地元での就職を「希望する」あるいは「どちらかというと希望する」と回答した者は，各年ともに全体の約７割に達している。交通機関が高度に発達し国内外の移動が短時間で可能になった今，何故「地元志向」なのであろうか。

太田總一（2010）によれば，地元志向になる理由の一つに，最近の若者が冒険をしたがらないことが挙げられる。就職先が地元企業であるなら，親や親族などから情報を得やすく自分自身が身近に感じられる企業も多いため，安心して就職できる。さらに，新しい環境に飛び込んで友人を作る努力をするより，今までの友人関係の中で安住する方がストレスは少ない。二つには，親子関係の変化がある。子どもにとっては，県外で自活するより親元で身のまわりの面倒を見てもらう方が余裕ある生活ができる。親にとっても，きょうだいが多い時代ではないために子どもを手元に置いても負担に感じない。三つには，地方部でも都会生活に近い満足度を得られるようになった点が挙げられる。店舗の全国展開により生活の利便性が高まり，インターネットや交通機関の発達により，地方にいても都会生活に近い暮らしができるようになった。

こうした議論を考える際には，客観的なデータの分析による裏付けが必要になる。しかし，太田（2010）は，信頼に足るデータの取得が難しく，これまでに正確な分析が充分になされていないことを指摘している。たとえば，進学のために地方から都市部に出てきた若者が地元に戻る「Ｕターン就職」について，少なくとも

公刊統計で長期にわたって追いかけたものはない。

また，大学生が就職活動をするに当たってどのような要因で就職先を選択しているのか，地元志向は顕著に認められるのか，家族関係の変化が，本当に地元志向の要因となっているのか。これらのことについて詳細に行った研究はほとんど見られない。そこで本稿では，大学生を対象にしたアンケート調査を実施することによって，大学生の就職活動における地元志向に及ぼす家族関係の影響について分析し明らかにした。

２．地元志向とは

ところで，「地元志向」の定義は，研究者によってさまざまである。杉山成（2012）は，大学生の就職活動における勤務地選択の要因について明らかにした。杉山は，地元志向について「若者が生まれ育った地域から離れたがらない傾向」と定義しており，地元への愛着の強さがその要因になっているが，地元志向の強い若者が必ずしも地元のために貢献したいとする意識を充分に持っているわけではない点を指摘している。

三浦展（2010）は，地元志向とは，子供の頃から住んでいる地域である地元にずっと住み続けたいとする「地元安住思考」，消費や娯楽を地元で楽しもうとする「地元消費志向」，地元を好ましいと思う「地元好き」の３要素から成ると考えられる。その中の「地元安住思考」に，地元進学志向や地元就職志向を含むことがあるとしている。

厚生労働省（2011）には，「新規学卒者の職業紹介状況」について解説している「図　域内就職率の推移（1962年～2010年）」の注に，「域内就職率とは，就職者に占める出身高校の所在地の都道府県に就職した者の割合を指す」と記されている。ここでの域内就職を地元就職と理解することもできる。

本稿では，便宜上，地元志向を「高等学校在籍時に居住しており，新規学卒時に出生家族である父母が居住している都道府県への就職を志向すること」と定義した。

３．家族関係の変化と地元就職志向

現代日本においては，少子化が社会問題になっており，既に人口減少が始まっている。厚生労働省「人口動態統計」（各年版）によれば，一人の女性が一生涯に産む子供数である合計特殊出生率は，1947年に4.54であったのが，2005年には1.26にまで大きく低下している。2013年には1.43となりわずかに上昇したものの，低位置に居続けている。このため，大学生のきょうだい数は，現在，平均２人である。

このことから，現代の親子関係では，少ない子どもに対する親の密着度が増し，特に母子関係が濃密になっていると指摘されている。母親は子どもに対して過干渉になりがちであり，子どもは大学生になっても何かにつけ母親に相談し意見を求めることが多いとされる。それは，将来の進路や就職活動に関しても言えることである。

「マイナビ」(2014)における調査結果においても,「両親や親族から受けたアドバイスが就職活動に影響したか」との設問に対して,「大きく影響した」と「多少影響した」との回答を合計すると全体の72％に及んでいる。また,「親や親族のアドバイスで地元就職を意識するようになったか」との設問には,「強く意識するようになった」と「どちらかというと意識するようになった」を合わせると70％に達している。

これらのことから，少子化の進展が親子関係を濃密にし,子どもの就職活動を地元志向にさせていると推測された。

４．調査の概要

4.1. 調査目的

大学生の就職活動における地元志向の現状とその要因について明らかにする。特に家族関係が及ぼす地元志向への影響について明らかにすることを目的とした。

4.2. 調査対象

国立大学法人Ｈ大学の学部学生を対象にアンケート調査を実施した。Ｈ大学の学生は，日本全国，特に西日本の各都道府県の出身者から成る。対象者は特に，真剣に卒業後の進路を考え就職先について具体的に決める段階に至った学部３～４年生とした。総合大学であるため，理系および文系の合計８学部において協力の得られた学生を対象とした。

4.3. 調査方法

就職活動への考えや出生家族との人間関係について聴くための質問票を作成し，アンケート調査を実施した。学生に配布し留め置き調査法を用い，各自が回答した後に回収した。調査実施期間は，2012年11月９日から12月17日までであった。

5．調査結果

5.1. 有効回収率および学年別対象者数

調査票の配布部数は165部，有効回答部数は136部，有効回収率は85.5％であった。学年別回答者は，合計136人（100％）のうち，３年生69人（50.7％，男子30.4％：女子69.6％），４年生67人（49.3％，男子58.2％：女子41.8％）であった。

5.2. 対象者の基本的属性

(1) きょうだいの数

自らを含めたきょうだいの数は，図１に示す通りである。２人きょうだいが全体の50.7％で最も多く，次いで３人きょうだいが33.8％，１人っ子が10.3％であった。

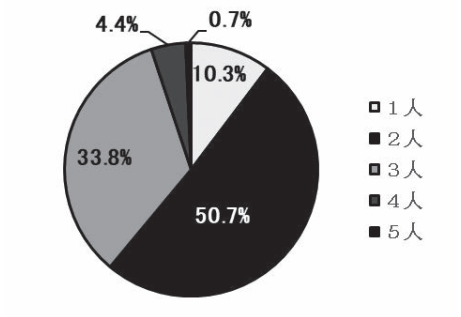

図1　きょうだい数

(2) きょうだいの中の順位

きょうだいの順位は，図２にみられる通りである。１人っ子の10.3％と２人以上のきょうだいにおける長男・長女の41.2％を合わせると，実質の長男・長女は51.5％で過半数となる。

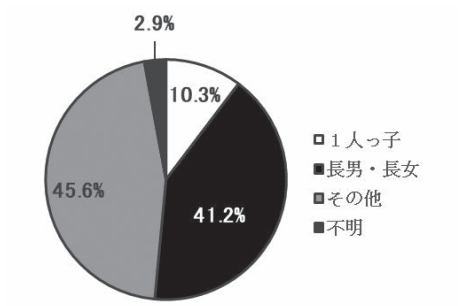

図2　きょうだいの中の順位

5.3. 親子関係の実態

(1) 親子の仲のよさ

家族間の仲のよさは，図３に示されている。父親との仲は，「大変よい」と「よい」を合わせると87.2％になる。母親との仲は，同値93.3％でありさらに高い値である。また，きょうだいの仲も，同値81.2％である。家族間の仲のよい状況で育ってきているものが多いと言える。

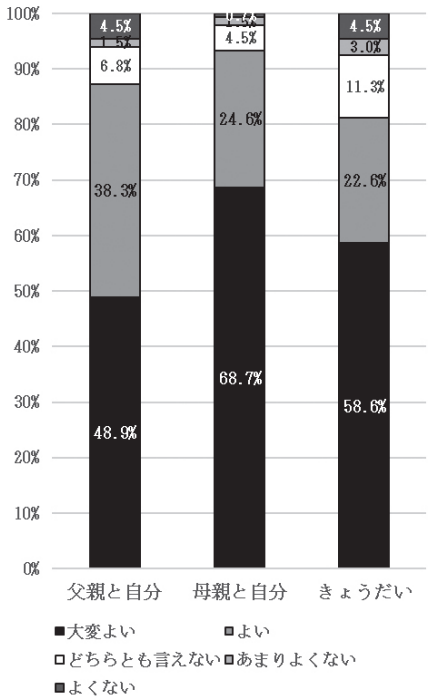

図3　家族の仲のよさ

(2) 家族への悩み相談

悩みがあるときに家族に相談するかを訊ねた結果が，図４に示されている。「よく相談する」と「ややする」を合わせた値は，父親に対しては25.6％，母親に対しては60.5％，きょうだいに対しては39.1％になっている。このことから，母親には相談することが多いが，父親には相談することが少ないことが分かる。

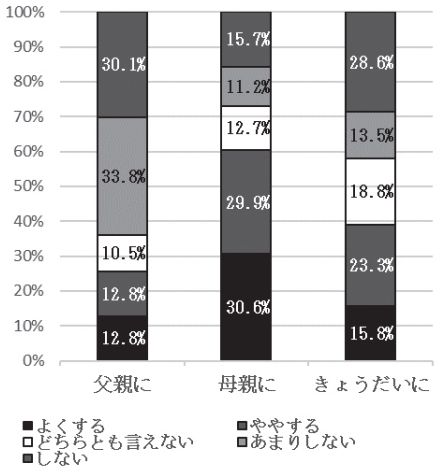

図4　家族への悩みの相談

(3) 就職活動の話

両親と就職活動の話をするかを訊ねたところ，図５に示す結果となった。「就職の話をする」と「ややする」を合わせると，父親とは48.5％の者が，母親とは63.9％の者がしている。悩みと同様に，母親への相談の比率が高い。

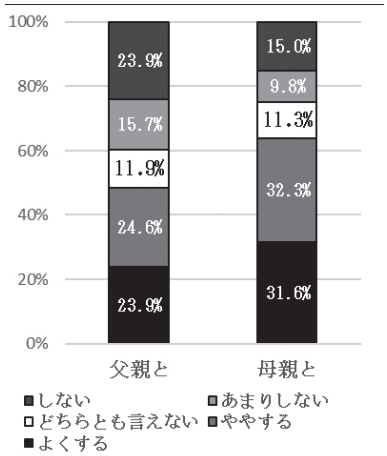

図5　父母との就職活動の話

(4) 将来の親の扶養・介護への意識

将来の母親の扶養や介護を担うつもりがあるかを訊ねた結果が，図６に示されている。この図は，当該学生のきょうだいの順位別に表している。

この図によれば，「将来の親の扶養や介護をする」，「ややする」と答えた者の割合は，１人っ子では92.9％に及び，１人っ子を除く長子（長男や長女）では64.2％，その他では63.3％である。どの順位でも扶養や介護を担うつもりのものが多いが，特に１人っ子の意識は高い。

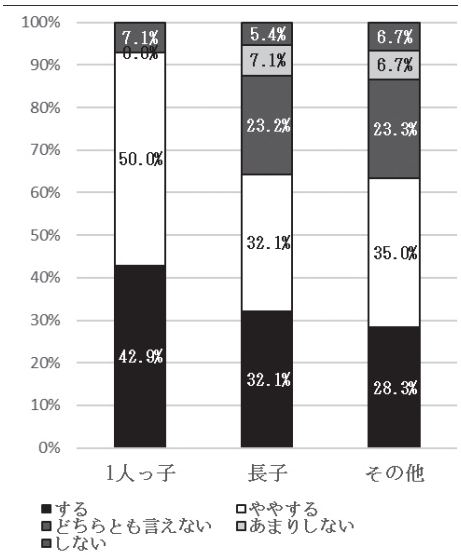

図6　将来親の扶養・介護を担うか

図示はしないが，父親の扶養や介護を担う意識は，母親に対するものと同様の結果が出ている。

5.4. 本人の希望する就職

(1) 希望職種

大学生が希望する職種は，図７に示す通りである。会社員が35.3％と最も多く，次いで公務員および教員が各22.8％である。

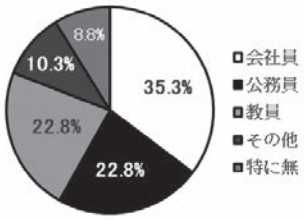

図7　希望職種

(2) 希望勤務地

希望する勤務地を聴いたところ，図８の通りの結果となった。「地元希望」は37.0％，「地元の近県」が23.7％，「東京などの大都会で働き，いずれは地元にもどりたい」は8.1％，「東京などの大都会」は5.2％，「国内ならどこでもよい」が11.9％，「海外」は0.7％，「海外を含めどこでもよい」が6.7％であった。

「地元」,「地元の近県」を合わせると60.7％になる。これに「大都会で働きいずれは地元に戻りたい」を加えると68.8％になる。逆に,「海外」を希望する人はわずか0.7％しかおらず,「海外を含めどこでもよい」を含めると7.4％である。広く見た時の地元志向が極めて多いことが分かる。

これを男女別にみたのが，図９と図10である。この２つの図を比較して男女を比べると，男女差はあまりない。違いといえば，男子は「大都会で働いた後にいずれは地元に帰りたい」がやや多い。女子は「地元」または「地元の近県」を希望するが男子よりやや多い。海外は，女子の1.3％が希望しているのに対して，男子では0％である反面,「海外を含めどこでもよい」と考えるのはやや男子に多い。

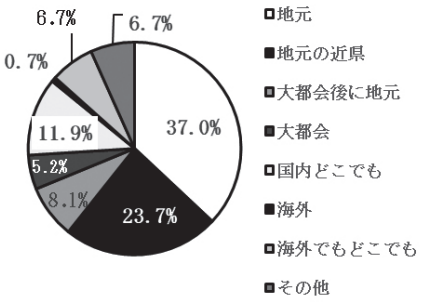

図8　希望する勤務地 (男女計)

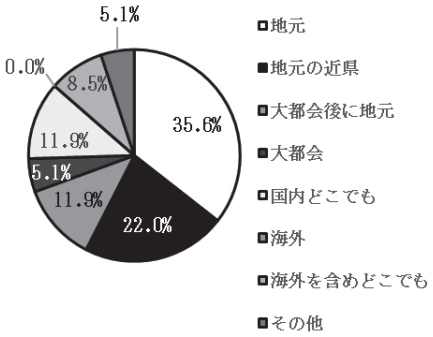

図9　希望する勤務地 (男子)

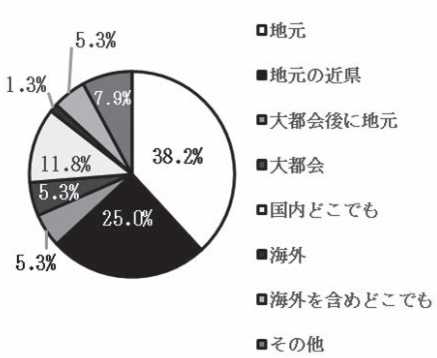

図10　希望する勤務地 (女子)

5.5. 就職活動に関する父母の意向

①地元就職の勧め

父母による地元就職の勧めがあったかを訊ねた結果が図11に示されている。「地元就職の勧めがあった」,「ややあった」との回答の合計は，父からが32.3％，母からが43.2％であった。特に母親からの勧めが多い。地元就職の勧めを，３分の１の学生が父親から受けており，半分弱の学生が母親から受けていることになる。

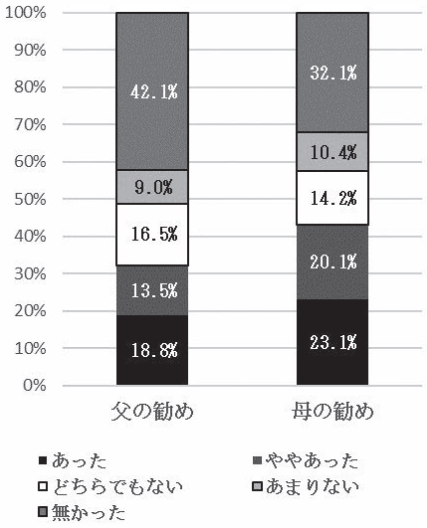

図11　父母による地元就職の勧め

②地元就職の勧めと子どもの立場

母親による地元就職の勧めを家族内での子どもの立場別に示したのが図12である。この図によれば,「母親から勧められたことがあった」,「ややあった」と回答した者は，１人っ子が最も多く64.3％，長子（２人以上のきょうだいの中の長男･長女）では51.8％であった。これに対して，その他の者は33.3％であり，１人っ子を含む長男・長女に地元に帰ってきてもらいたい母親が多いことが判明した。

ここでは母親の勧めのみ示し，父親に関しては示さないが，父親は母親の場合より働きかけが少ないが，母親と同じ傾向であった。

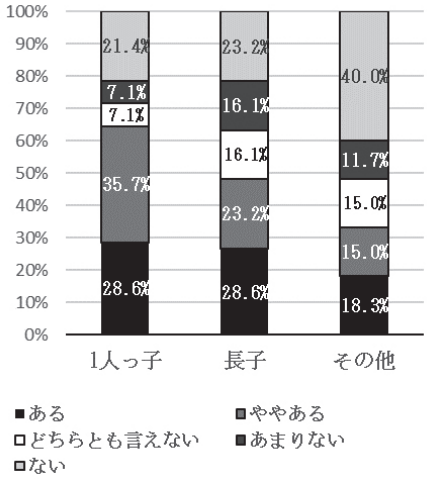

図12　子どもの立場と母親の地元就職の勧め

③地方公務員の勧め

父母による地方公務員の勧めがあったかを訊ねた結果が，図13に示されている。「地方公務員の勧めがあった」，「ややあった」との回答の合計は，父親からが32.3％，母からが43.2％であった。特に母親からの勧めが多い。地方公務員の勧めを，３分の１の学生が父親から受けており，半分弱の学生が母親から受けていることになる。地方公務員の勧めも，地元での就職の場合が多いため，地元就職の勧めと重なる。

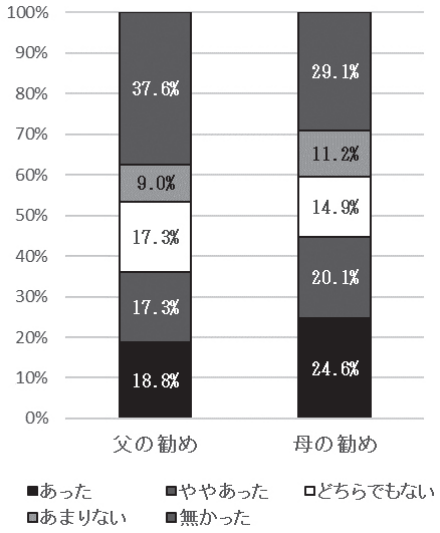

図13　父母による地方公務員の勧め

5.6. 家族関係と地元志向

(1) 父母の地元就職の勧めと地元志向

地元志向のレベル別に，母親による地元就職の勧めを表したのが図14である。この図によると，「母親から地元就職を勧められる」と「ややある」を合わせた値が，「地元志向」の者で50.9％，「広義の地元志向」の者で53.2％に及んでいる。それに対して，その他の者では，その値が22.5％でしかない。

このことから，母親の地元就職の勧めが子どもである学生の地元志向を誘発しているといえる。母親は，子どもが地元志向であるから，さらに後押しをするつもりで地元就職を勧めているということかも知れない。

父親の地元就職の勧めと地元志向の関係について，図示はしないが，母親の場合より勧められた子どもは少ないが，同様の傾向を表していた。

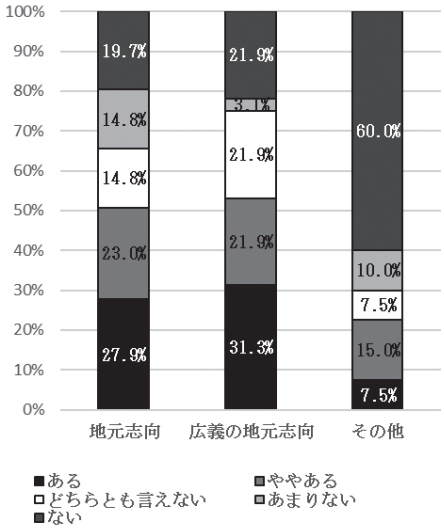

図14　母親による地元就職の勧めと地元志向

（注）「地元志向」とは，地元（出身の都道府県内）の就職希望を指す。「広義の地元志向」とは，地元の近県での就職希望や，大都会での就職後に地元での就職希望を指す。

(2) 子どもの立場と地元志向

図15は，子どもの立場別の地元志向の比率を表している。何より長子の地元志向の比率は58.2％で，過半数に達している。これに「広義の地元志向」を加えると81.8％にまで及ぶ。また，１人っ子の場合は，地元志向が42.9％，これに「広義の地元志向」を加えると79.6％になり，長子と同様に極めて比率が高い。その

他は，１人っ子を含む長子よりこの比率が低いことから，日本の伝統的な考え方である長男や長女を跡取りとみなす考え方が残っているのであろう。

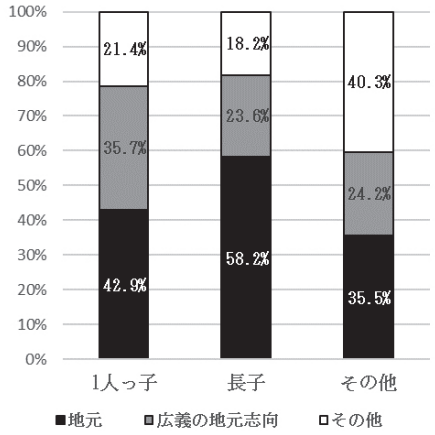

図15　子どもの立場と地元志向の関係

（注）「地元志向」とは，地元（出身の都道府県内）の就職希望を指す。「広義の地元志向」とは，地元の近県での就職希望や，大都会での就職後に地元での就職希望を指す。

６．まとめ

本稿では，就職活動に真剣に向き合う時期にある大学学部３・４年生を対象に，家族関係や就職活動，進路希望などについてアンケート調査を行った。その結果を用いて，家族の中の自らの立場や親子・きょうだい関係，職種や勤務地などに関する就職希望，家族関係と地元就職や地元志向との関係について分析を行った。その結果，以下のことが明らかになった。

・日本における少子化が進展する中で，きょうだい数は自らを含めて２人ないし３人である者が多い。
・１人っ子を含めると，長男・長女の立場の者が過半数に達していた。
・両親や兄弟との仲がよい者が極めて多く，とりわけ母親との関係が良好である。
・悩みの相談を母親に持ち掛ける者が多く，６割いた。母親に比べると，父親への悩みごとの相談は少ない。
・就職活動についての話も母親にするものが多く64%に及んでおり，父親に対しても半数近くの者が話している。
・将来は親の扶養や介護を担う考えをもっている者が多く，特に１人っ子はほとんどの者がそのつもりでいる。長子やその他の立場の者も65%程度はそう考えている。
・就職については，調査対象者の内，希望する職種を会社員，公務員，教員とする者が，それぞれ35%，23%，23%であった。教育学部の学生が比較的多く含まれているため，教員志望者が社会一般の若者より多くなったものと考えられる。
・希望する勤務地を「地元」とする者が37%，「地元の近県」とする者が24%おり，「大都会で働いた後地元に戻りたい」とするものも含めると，約７割の者が地元就職を希望している。海外での勤務に対する希望はほとんどなかった。
・父母からの「地元就職の勧めがある」と回答もあり，父親からの勧めは32%，母親からの勧めは43%であった。特に１人っ子の場合には，64%もの母親が地元就職を勧めていた。
・地元志向あるいは広義の地元志向がある学生の約半数が母親から地元就職を進められており，母親の勧めの影響を少なからず受けているものと推測される。
・１人っ子や長男・長女である者は，地元志向や広義の地元志向の者が圧倒的に多かった。いわゆる「跡取り」の意識があり，老後期に入った時の父母の扶養や介護を担う意識があり，そのためには地元就職が望ましいという意識が働いている可能性がある。

７．考察

地元就職を希望する地元志向の大学生が多い結果となった。この要因の大きなものとして，家族関係の変化があることが明らかになった。日本では，きょうだい数が1940年代までは平均５人であったのが，1950年代以降の少子化の進展により，現在では２人にまで減少している。

父母にとって子どもは，成人しても貴重な存在になっている。子どもは，社会人になるまでは，親が多額の教育費を負担して大切に育てるが，その後は，長寿になった親にとっての精神的な支えになっているのではなかろうか。高齢期には，身体的にも精神的にも周りの人々からのサポートが必要になる。生活上のサポートは社会福祉や社会保障が担う部分が大きい。しかし，それではぬぐえない不安や精神的豊かさのための心理的支えが高齢者には必要であり，そこに子どもの存在が重要なものとなっていると考えられる。このため，子どもは，地元就職をし，いつもそばにいて欲しい存在なのである。そのために，大学生の子どもに対して地元就職を勧めるのである。

若者にとっては，成人する時期になっても母親に何

かと相談するのが当たり前の生活を送っている。家族の仲もよいため，社会の変化が激しくストレスが多い現代社会では，家族，特に母親の存在が安心感を与えてくれている。就職し社会に出ていくについては，何かと不安がある。家族が傍にいて，社会環境もよく分かっている地元で就職するのが，着実な生活を送ることのできる安心な選択であると考えられているものと推測される。

本稿では，家族関係と大学生の地元志向について検討したが，地方の国立大学１校の大学生を対象に調査した結果を分析したに過ぎないため，現代の大学生のごく一部を分析したことになる。大都会や海外に留学している大学生は，これとは異なる志向や嗜好，思考で就職先を選択しようとしている可能性がある。今回調査対象としたＨ大学の近辺でも，異なる考え方や行動を行う大学の学生も多くいる可能性もある。今後，さまざまな大学生に調査する必要がある。

本研究は，早川香澄氏の2012年度広島大学教育学部卒業研究のデータを基に作成した。ここに深く感謝申し上げる。

【引用文献】

・太田總一（2010）『若年者就業の経済学』日本経済新聞社，pp.192－200.
・轡田竜蔵（2009）「地元志向と社会的包摂・排除―地方私立Ｘ大学出身者を対象とする比較事例研究―」，樋口明彦編『若者問題の比較分析―東アジア国際比較と国内地域比較の視点―論文集（Ⅲ）』，pp.151－170.
・厚生労働省『労働経済の分析（平成23年度版）』pp.89－92.
・厚生労働省（各年版）「人口動態統計」
・杉山成（2012）「大学生における地元志向意識とキャリア発達」，『人文研究』第123号，pp.123－140.
・平尾元彦・重松政徳（2006）「大学生の地元志向と就職意識」，『大学教育』第3号，pp161－168.
・マイナビ（2012－2015）大学生　Ｕターン・地元就職に関する調査」株式会社マイナビ
・三浦展（2010）『日本若者論―よさこい，キャバクラ，地元志向』，pp.23－38.